

GREETING

本日は、株式会社ムジカ・チェレス主催「Missシカゴ公爵」にご来場くださいまして、誠にありがとうございます。ムジカ・チェレスとしてオペレッタの全幕上演4作目となる今回は、日本プロ初演の大挑戦を致しました。そして、ホームグラウンドである渋谷で開催できますことを、とても嬉しく思います。

大好きなカルマーンが“愛と平和のメッセージ”を込めたこの作品を通して、皆様に“国や人種や価値観、ジャンルを超えて愛し合うこと、認め合うこと”の素晴らしさをお届けしたいと準備に励んでまいりました。プロ初演ということで、資料も大変少なく、手探りの中で皆で意見を出し合い、時にはぶつかり、時に認め合いながら作品を掘り起こしていく作業から始めたことで、作品の世界観と意図を体感しながら創り上げて来たと実感しております。

また、今回浅草オペラ100周年事業という副題をつけさせていただきました。浅草で上演するわけでもないし、浅草オペラに関連する曲を演奏するわけでもないのに、どうしてだろう?と思われたお客様いらっしゃるかもしれません。

今年は浅草オペラ100周年ということで、弊社では7月に、僭越ながらエンターテインメント・クラシック®の精神を体现する浅草オペラの“現在”的位置づけとして浅草花やしきで「チャールダッシュの女王」を、9月には“過去”(浅草オペラの復元)として浅草花やしきで「田谷力三物語」を、そしてこの作品はこれからの方向性を示す“未来”を象徴するものとして選ばせていただきました。浅草オペラのエンターテインメント・クラシック®を改めて見つめ直し、お客様に喜んでいただけ、愛される公演の真髄を学び、これからのオペレッタ界をリードしていくべく、様々な最新流行が発生する土地“渋谷”にて、日本プロ初演される「Missシカゴ公爵」がこれから100年後も続けて愛されていくべき、るために全力で挑戦したいと思っております。

皆様とその瞬間に楽しんで、一緒に体感できること出来ましたら望外の幸せでございます。

どうぞこれからもあなたかくお見守りくださいますよう、何卒よろしくお願い致します。

株式会社ムジカ・チェレス代表取締役 佐藤智恵

STORY

序幕(Vorspiel)

シルヴァリア国の王位継承者シャーンドル王子は、祖国の油田がアメリカの大富豪、シカゴのベンジャミン・ロイドに担保に取られたことで怒っている。そこで彼は、少し気晴らししよう、と忍びでブタペストへ逃げ出す。彼はまた近々従妹の、モレニア国のローゼマリー姫と結婚することになっており、この姫もシャーンドル王子同様、貧しいのである。

[王子たちがやって来た]「グリル・アメリカーヌ」の客たちは、チャールダーシュや古き良きウィーンの楽曲より(王子には耐えられない)チャールストンやジャズを好んでおり、王子と馴染みの楽団長も、演奏を許されているのはジャズだけ、という有様。

そこへメアリー・ロイド娘が、父親の私設秘書ジョニー・ボンディと共に現れる。ボンディ自身も大富豪なのである。マリーは、「若い婦人の変てこクラブ」の一員としてヨーロッパを旅行中で、その目的はひとつの賭を行うことだった。その賭とは、金で手に入れるのが最も難しいものを手に入れた人が、百万ドルを得る、というもので、メアリーは

[シャーンドル王子のお伴が化けている]にせの王子とチャールストンを踊りたがる。

[にせの王子]副官に化けているシャーンドルは、その要望を王子の意向として断るが、ワルツなら喜んでお相手下さるだろうと言い添える。続いて、金にものを言わせて、

チャールストンだ、ワルツだ、と曲の取り合いが起き、シャーンドルが負ける。店の客たちはジャズをほめそやし、メアリーは近いうちに必ず王子とチャールストンを踊ってみせる、とシャーンドルに宣言する。

第1幕(Erster Akt)

シャーンドル王子は自身の誕生日を祝い、おじであるパンクラツ王に代わって政務を引き継ぐ。王子は、メアリー・ロイドのシルヴァリアへの到着を知らされ、また彼女が、住民にチャールストンを流行らせようと企んでいるのを知り、ただちにそれを全土で禁止させる。

ボンディは、メアリーが王の城を購入して、徹底的に改装するつもりであることを、シルヴァリアの大臣たちに伝える。メアリーは六十億ドル払う用意があり、大臣たちは承諾する。

モレニア国のローゼマリー姫(舌足らずな発言をする、一種の障害がある)が登場し、本人たちと関係なく、シャーンドル王子と姫との結婚話が大臣たちによって進められていることを知る。

シャーンドル王子は、メアリーが城をどうするつもりか知って、激怒する。メアリーは子供時代の人形をひきあいにして、弁明する。(その人形は)すてきな制服を着ているが、中身はわらだけだ、と。

ボンディとローゼマリー姫は偶然出会い、姫は、発音障害のせいで金持ちからは相手にされず、貧しいシャーンドル王子と(王家間で決めた)結婚をしなければならない、と話す。ボンディは、自分も事情はまったく同様だ、自分たちが猛反対しようが、自分とメアリーの父親たちは自分たちをなにがなんでも結婚させるつもりだ、と嘆く。

シャーンドル王子は、メアリーが一新しようとしている“古ぼけたガラクタ”が、自分は(幼少期の思い出に満ちた)いかに大事な場所であるかを、詳しく説明する。ついにはメアリーも、王子の正体を理解する。王子は城の売却に同意するが、その代金は国民の福祉のために用いられることになっている。

王子が城を去ると、メアリーは父親に「城を貰った。そこに付属している王子も手に入るつもり」と電報を打つ。

第2幕(Zweiter Akt)

買い取られた城は、莫大な費用をかけて最新の設備が施されたが、シャーンドル王子が気づいたように、その伝統的な良さは失われてしまった。王子は、相変わらずメアリーと踊ののを拒んでいたが、メアリーがワルツを習っているので、笑ってしまう。メアリーも負けではない——なぜ、彼女のジャズ楽団長が毎日王子の元へ行くのか?王子は、チャールストンをマスターしなければならない、と打ち明ける。チャールストンを全土で禁止させたので、おおっぴらに、とは行かなかったのだ。

シルヴァリアの大臣たちは、王子とメアリーとの結婚に希望を抱く。パンクラツ王も同意し、メアリーをシカゴ公爵に叙するのだった。こうするとメアリーは、その花婿候補たる王子と同等の身分となる。ボンディには、その骨折りをたたえて、ダビデの星勲章と世襲伯爵位が授与されることになる。あとは、メアリーの父ロイド氏の同意を得るだけとなる。

ロイド氏が、「若い婦人の変てこクラブ」のメンバーと共に到着する。メアリーは父親に不可解な電報について説明するよう迫られる。メアリーは、自分が王子に恋していることを打ち明けたくないでの、例の賭けのことを伝えるが、ロイド氏は事情を理解する。

ローゼマリー姫とボンディは再会し、ボンディは貧しい王子ではなく裕福な伯爵が求婚したら、と尋ねる。姫は、大感激して、この申し出を受け入れる。

ロイド氏はシャーンドル王子を念入りに観察しようとする。王子は、メアリーが自分に恋しているなどとは思ってもいないのである。はじめは王子のことを全くのイエスマンだと思っていたロイド氏も、やがて王子の性格の強さを悟る。

「変てこクラブ」のメンバーは王子を品定めし、(例の賭けの一等賞はメアリーのものだという決定に至る。王子は、大臣たちが自分をシカゴのロイド社に売るつもりでいることを知り、またメアリーの電報を入手し、裏交渉に腹を立てた。

メアリーが、公爵に叙せられたことが公表され、その一方王子はある声明を発表する——ローゼマリー姫との婚約である。これには、ボンディもメアリーもただただ驚くばかり。

終幕(Nachspiel)

「グリル・アメリカーヌ」で、パンクラツ王は、裕福なロイド氏の娘[メアリー]が自分たちの思惑通りにならなかったことでご機嫌斜めである。メアリーが見知らぬ紳士と店に現れると、王は自らメアリーに求婚しようと決心する。

シャーンドル王子もブタペストに来ており、ローゼマリー姫が裕福なアメリカ人青年[ボンディ]と駆け落ちしたことを知る。また王子はメアリーが外国人紳士と店内にいることに気づき、その紳士が無遠慮に自分を見つめているので、その無作法な態度の証をきこうと、自分のテーブルに呼んで来させる。

その外国人紳士は、王子にメアリーへの愛の告白をさせようと、わざと不作法にふるまっていたのだった(メアリーはもとより王子に夢中なのだ)。

その紳士は、パラマウント・フォックス映画会社の社長で、この会社は、実話の方がシナリオ作家が考えていたものより、ずっといい映画になると気づいていたのだった。

メアリーのシカゴ公爵への叙任が、最新作の話題を提供しており、そこでは実際と異なり、ローゼマリーとの婚約はうまく解決されて、ハッピー・エンドで終わるようになっており、これこそアメリカの観客が欲するものなのである。

メアリーは、初めて会った時から王子を愛していたと告白し、今やふたりがチャールストンを踊る時がやって来た。王子は、チャールストンはもう流行おくれだが、スロー・フォックスなら喜んでお相手しましょう、と言うのだった。

CAST

日本を代表するオペレッタ・アーティストが勢ぞろい!



メアリー・ロイド ボンディ(ロイド氏の秘書) ペローリン侯爵(シルヴァリアの国務大臣) ポヤツオヴィッチ伯爵(シルヴァリアの財務大臣)



ティハニー・謎の紳士(グリル・アメリカーヌ支配人/謎) プリマス(ジプシーの楽士長) ベンジャミン・ロイド(メアリーの父、シカゴの大富豪) メアリーの母 ネグレスコ伯爵



アスター 関根かおる カーネギー 織田彩耶子 フォード 神谷優香 ロックフェラー 西綾夏 ヴァンダービルト Yurino 売り子・スティール 小瀬礁子 侍従者 吉岡努 ダンサー 宇田川路代 ダンサー 田中麻衣子



■プロデューサー: 佐藤智恵 ■演出原案: 今井伸昭 ■訳詞・台本: 吉井淳 ■舞台監督: 磯田ヒロシ ■照明: 磯野眞也(有)アイズ ■編曲: 大野恭史 ■音響: 五十嵐優(Sound Scape) ■振付: 宇田川路代 ■ステージング: ヨシ矢野 ■衣装: 美月逢花 ■動画撮影: 下條高裕 ■訳詩・台本: 吉井淳 ■広報デザイン: マーブルデザイン ■表紙撮影・舞台撮影: 長澤直子 ■配券管理: 合同会社アンデム ■稽古ビアニスト: 富永有里乃、樋口めぐみ ■制作: 株式会社ムジカ・チェレス

STAFF